

=== T A C S 情報 第5号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和8年6月23日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、19.5℃（対平年差+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。

6月上旬の平均気温は、21.6℃（同+1.3℃）と平年並に比べかなり高かった。

6月中旬の平均気温は、23.1℃（同+1.8℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、89.0mm（対平年比72%）と平年並であった。

6月上旬の降水量は、39.0mm（同185%）と平年に比べ多かった。

6月中旬の降水量は、42.5mm（同82%）と平年並であった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、21.2MJ/m²/日（対平年比115%）と平年に比べかなり多かった。

6月上旬の平均全天日射量は、16.7MJ/m²/日（同85%）と平年に比べ少なかった。

6月中旬の平均全天日射量は、23.3MJ/m²/日（同136%）と平年に比べかなり多かった。

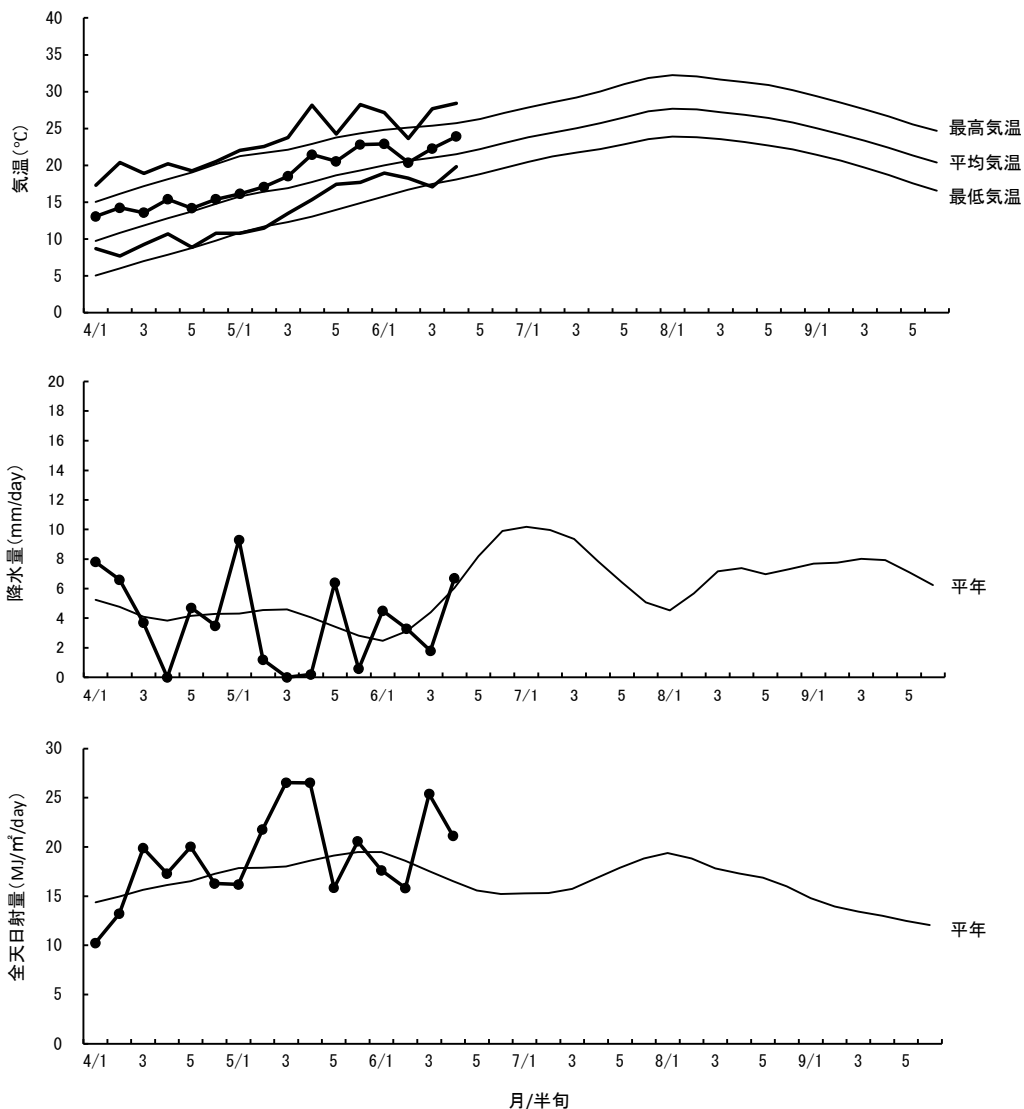


図1 令和8年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）富富富

近年に比べ、草丈はやや長く、茎数は多く、葉色は淡く、葉齢は0.6葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや多く、葉色は淡くなっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月23日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R8	5月17日	40.2	27.3	610	10.1	4.2	38.3
R7	5月17日	40.1	24.1	528	9.5	4.3	42.2
近年	5月15日	38.1	24.5	529	9.5	4.4	41.7
前年比・差	0	100	113	115	0.6	-0.1	-3.9
近年比・差	2	106	111	115	0.6	-0.2	-3.4

注)近年：H29～R7の平均

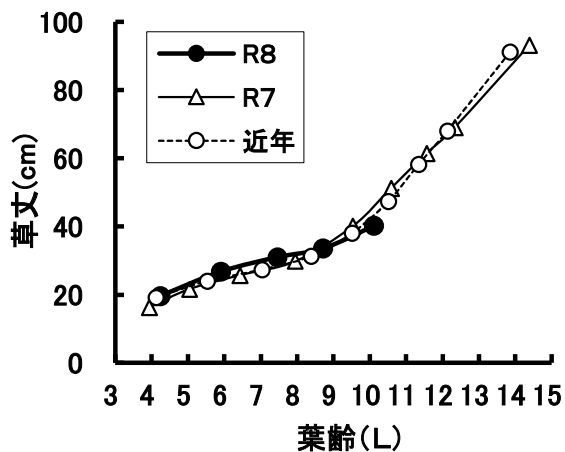


図2 草丈の推移（生観富富富）

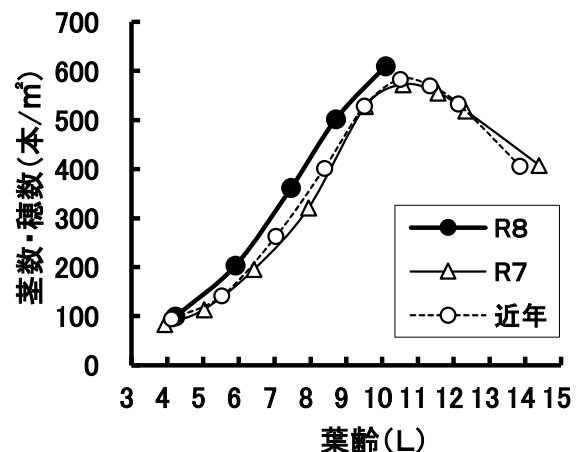


図3 茎数の推移（生観富富富）

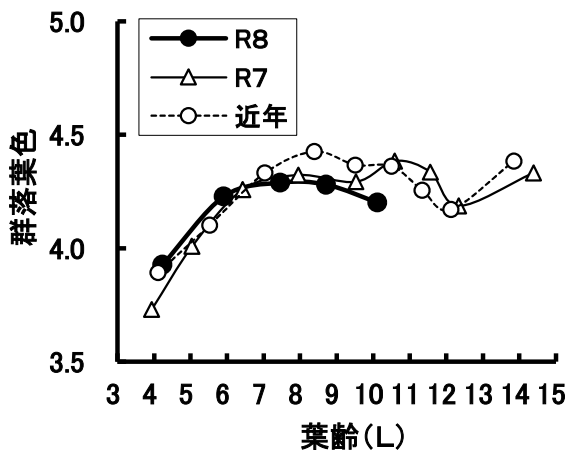


図4 葉色の推移（生観富富富）

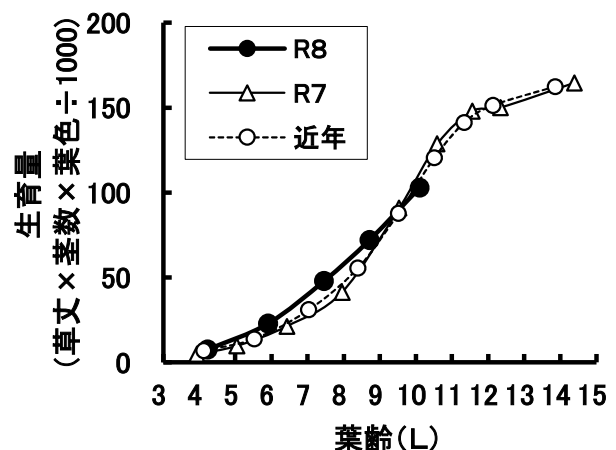


図5 生育量の推移（生観富富富）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈は長く、茎数は多く、葉色は淡く、葉齢は0.7葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は並、茎数はやや多く、葉色はやや淡くなっている。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月23日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R8	5月13日	49.1	27.2	579	10.6	4.1	36.9
R7	5月13日	48.3	24.5	529	10.1	4.2	39.1
平年	5月14日	44.7	24.1	526	9.9	4.3	39.5
前年比・差	0	102	111	109	0.5	-0.1	-2.2
平年比・差	-1	110	113	110	0.7	-0.2	-2.6

注) 平年：H28～R7の平均

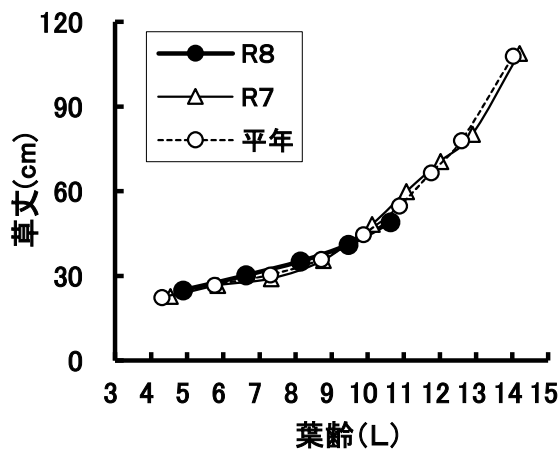


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

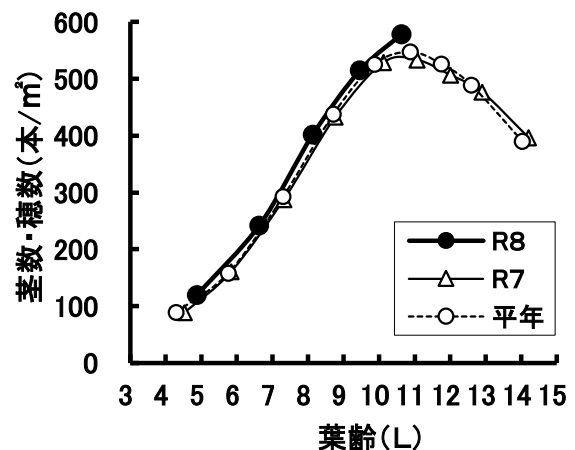


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

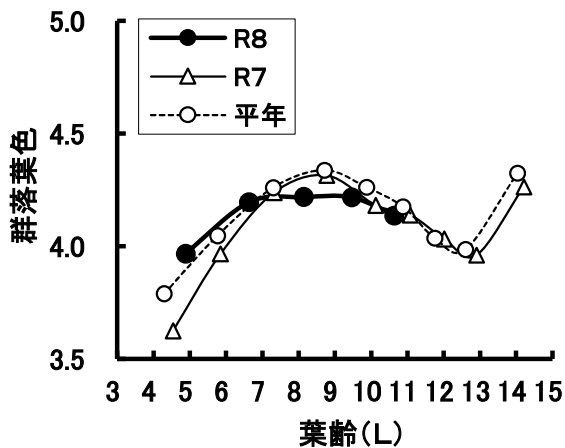


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

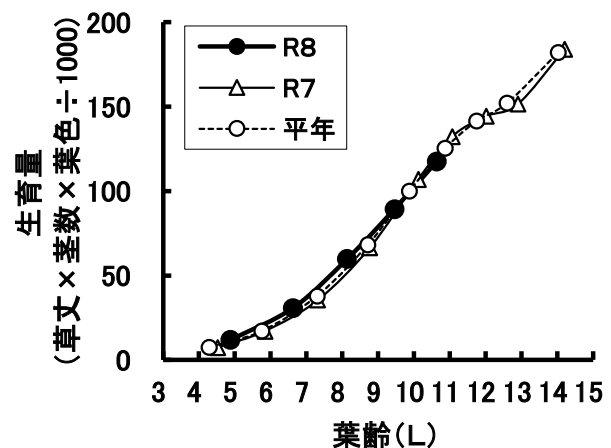


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんたかく

平年に比べ、草丈は長く、茎数は並、葉色は淡く、葉齢は0.7葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は平年に比べ7日早い6月17日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ7日早い7月8日頃と見込まれる。

表3 「てんたかく」の生育状況（6月23日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R8	4月29日	60.3	31.7	653	11.7	4.3	36.9	6月17日	(7月8日)
R7	4月30日	54.7	31.2	641	11.0	4.3	41.8	6月24日	7月17日
平年	5月1日	52.3	30.8	659	11.0	4.4	41.2	6月24日	7月15日
前年比・差	-1	110	102	102	0.7	0.0	-4.9	-7	(-9)
平年比・差	-2	115	103	99	0.7	-0.1	-4.3	-7	(-7)

注1) 平年:H28~R7の平均、ただし、幼穂形成期はR2~7の平均

注2) R8の出穂期は推定値

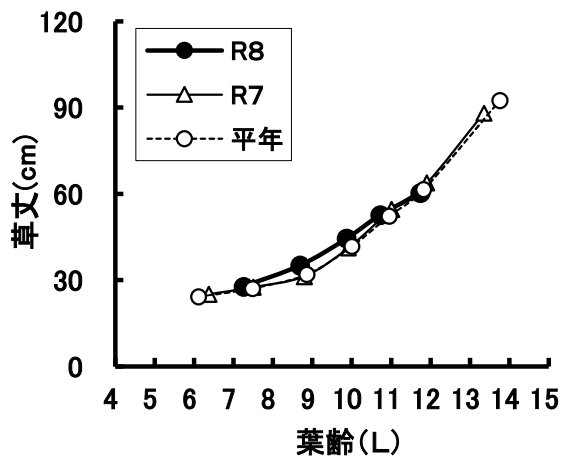


図10 草丈の推移（生観てんたかく）

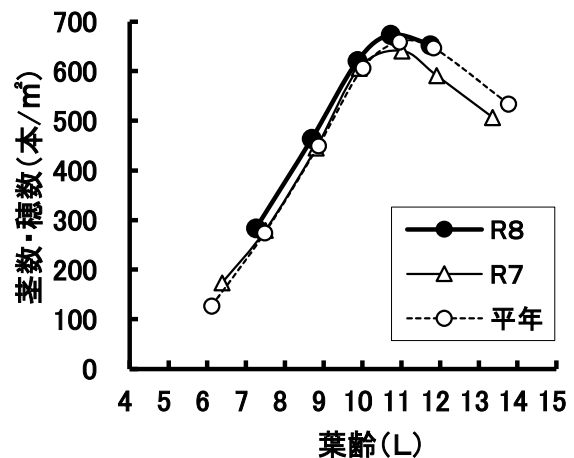


図11 茎数の推移（生観てんたかく）

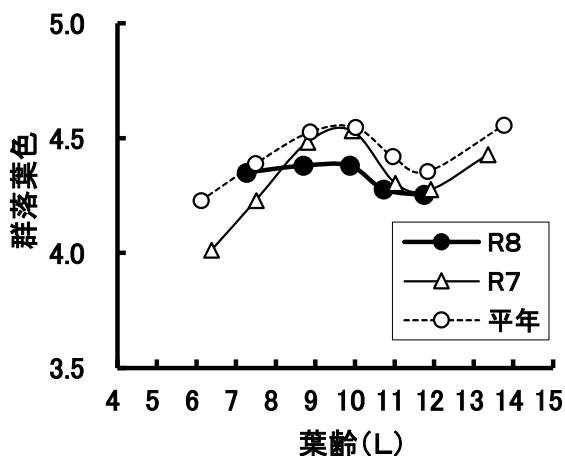


図12 葉色の推移（生観てんたかく）

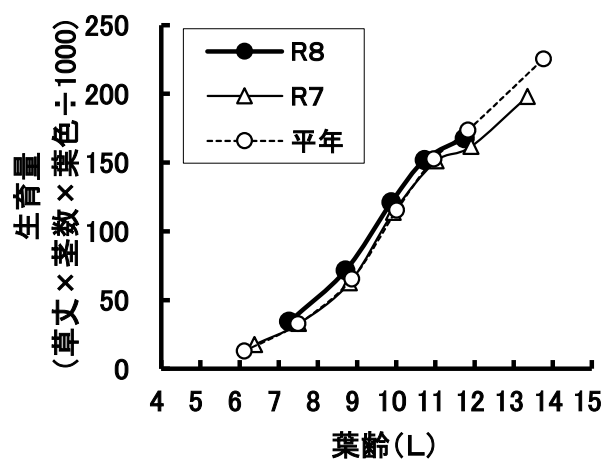


図13 生育量の推移（生観てんたかく）

(4) てんこもり

平年に比べ、草丈は長く、茎数はやや多く、葉色は淡く、葉齢は0.7葉進んでいる。
 葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

表4 「てんこもり」の生育状況(6月23日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R8	5月9日	42.6	35.8	706	11.6	4.1	36.2
R7	5月12日	37.9	30.8	598	10.3	4.3	40.8
平年	5月9日	38.6	34.2	654	10.9	4.3	39.4
前年比・差	-3	112	116	118	1.3	-0.2	-4.6
平年比・差	0	110	105	108	0.7	-0.2	-3.2

注)平年：H28～R7の平均

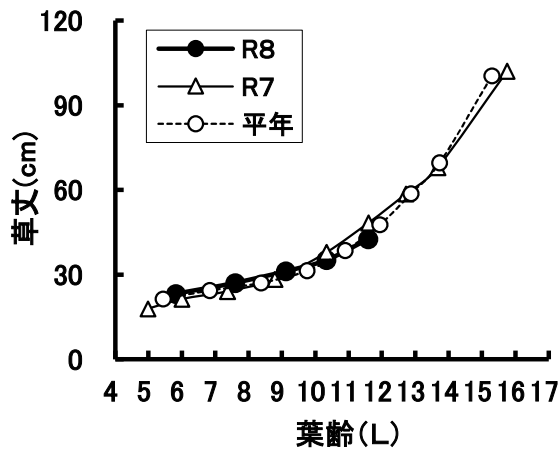


図14 草丈の推移(生観てんこもり)

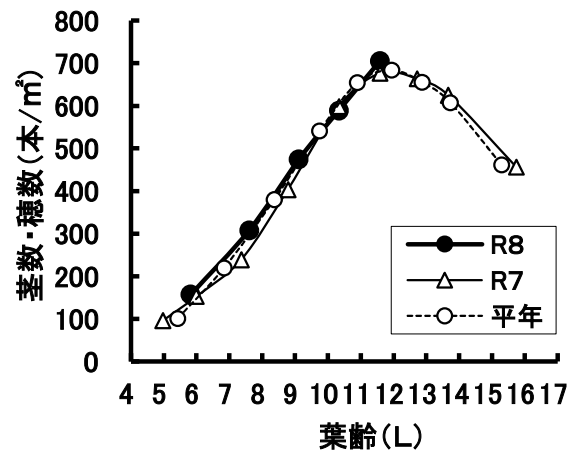


図15 茎数の推移(生観てんこもり)

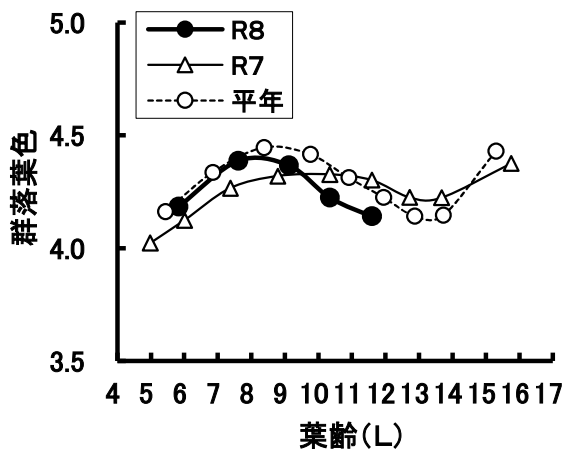


図16 葉色の推移(生観てんこもり)

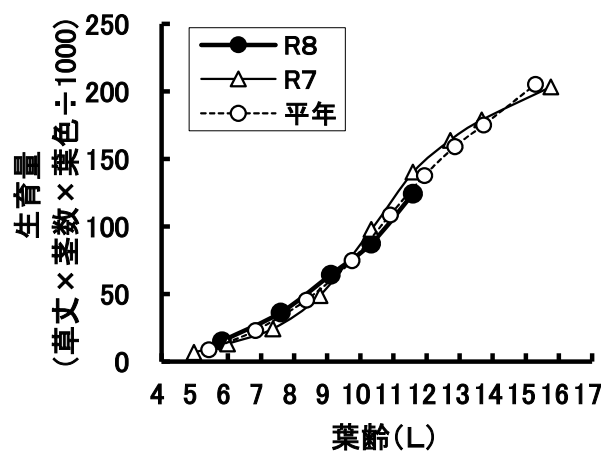


図17 生育量の推移(生観てんこもり)

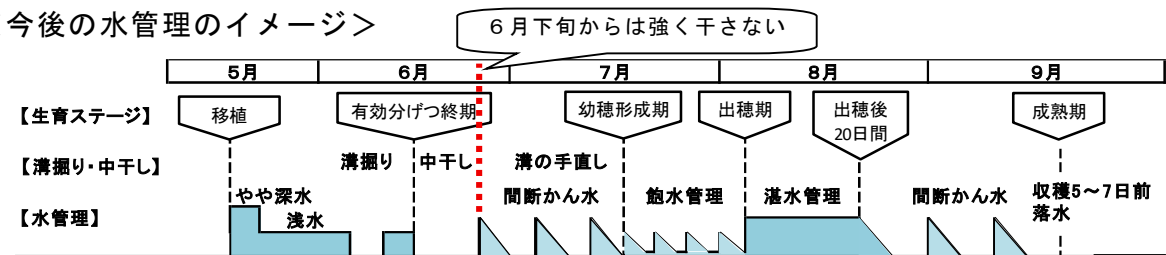
3 当面の技術対策

- ・葉色の低下を防ぐため、中干し後の間断かん水では落水期間が長くなり過ぎないように注意し、幼穂形成期頃までに足跡の深さ3 cm程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、稲体活力を維持するため飽水管理を徹底する。
- ・「てんたかく」及び「てんこもり」は、葉色が淡い場合は速やかに追肥を行う。
- ・早生品種及び中生品種の生育がかなり早くなっており、出穂期や成熟期が早まると見込まれることから、防除や刈取り計画の前倒しを検討する。

(1) 中干し後の水管理

- ・葉色の低下を防ぐため、中干し後は間断かん水を行い、幼穂形成期までに足跡深さ3 cm程度の土壌硬度とする。
- ・土壌を乾かし過ぎると葉色が低下するため、中干しや間断かん水では落水期間が長くなり過ぎないようにする。特に、中干しが遅れたほ場では、過剰生育によりさらに葉色が低下しやすいことから、肥料を効率良く吸収できるよう、遅くとも穂肥成分が溶出し始める6月下旬までに中干しを終える(図18、表5)。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、稲体の活力を維持するため、飽水管理(足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持)を徹底する。

<今後の水管理のイメージ>



早生品種は近年よりも早く幼穂形成期を迎えているため、遅れずに飽水管理を実施する

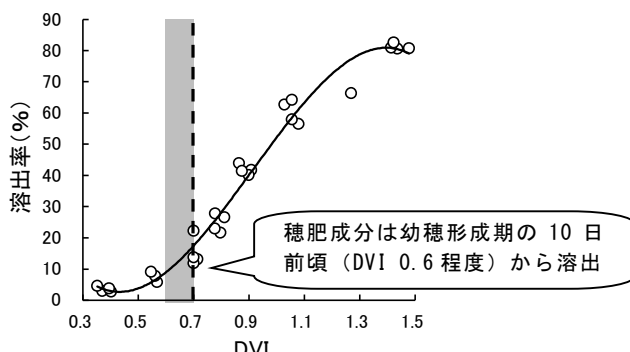


表5 令和8年度の中干しの開始時期と終了の晩限

田植日 (月/日)	開始時期 (月/日)	終了の晩限 (月/日)
5/10	6/3	6/20
5/15	6/8	6/25
5/20	6/13	6/30

遅くとも肥料の穂肥成分が溶出し始める6月下旬頃には中干しを終える

図18 コシヒカリ用肥効調節型基肥肥料の穂肥成分の溶出率の推移 (H29、H30、R2、R3農研)

注) 穂肥成分: JSD(80)、JSE(100)

(2) 追肥対応

ア 共通事項

- ・作付前にケイ酸質資材や加里資材を散布していないほ場では、最高分けつ期～幼穂形成期頃を目安に積極的にこれらの資材を施用し、稲体の充実を図る。

イ 「てんたかく」、「てんこもり」

- ・肥効調節型基肥栽培では、葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

ウ 「富富富」、「コシヒカリ」

- ・幼穂形成期頃の追肥は、過剰籾数による登熟歩合及び品質の低下や「コシヒカリ」の倒伏を招くため、原則施用しない。一方、現在、葉色が淡く、出穂後の高温が見込まれることから、登熟や品質の向上に向け、追加穂肥の積極的な施用を検討する。

(3) 作業計画の前倒し

- ・「てんたかく」の幼穂形成期は、平年に比べ7日早い6月17日と、これまでで最も早く、出穂期は7月8日と見込まれる（表6）。
- ・他の品種においても生育がかなり早まっており、幼穂形成期、出穂期及び成熟期が早まると見込まれることから、追肥、防除及び刈取りの計画を前倒しにするよう検討する。

表6 「てんたかく」の生育ステージ

年次	田植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期
R8	4/29	6/17	(7/8)	(8/12)
R7	4/30	6/24	7/13	8/16
R6	5/2	6/25	7/16	8/20
R5	5/3	6/24	7/15	8/16
R4	5/1	6/25	7/14	8/19
R3	5/3	6/27	7/17	8/21
R2	5/2	6/22	7/16	8/23
近年	5/1	6/24	7/15	8/19

注1) 近年はR2～7の平均値

注2) 括弧書きの日付は推定値。出穂期、成熟期は過去の生育ステージを参考に推定。

(4) 病虫害防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類

- ・現在、畦畔・雑草地及び本田における斑点米カメムシ類がかなり多くなっている（6月20日農業研究所調査）。
- ・今後の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように草刈り等による畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。
- ・本田内のノビエやホタルイは斑点米カメムシ類の繁殖源となるため、水田内雑草の発生状況に注意し適切な除草対策を行う。
- ・麦あとは場はカメムシ類の繁殖好適地となるため、雑草が繁茂しないように管理するとともに、積極的に園芸作物や緑肥等を栽培する。

草刈り運動期間：6月26日（金）～7月5日（日）
一斉草刈り日：6月27日（土）～6月28日（日）

- ・早生品種の出穂が平年に比べ7日程度早まることが予想されるため（表7）、防除計画を早め、穂揃期（出穂3～5日後）と傾穂期の適期の2回防除を徹底する。また、例年カメムシ類の発生密度が高い地域では、予め追加防除を計画に組み込む。

表7 「てんたかく」の防除時期の目安

年次	出穂期	本田防除	
		1回目 (穂揃期)	2回目 (傾穂期)
R8	(7/8)	(7/11)	(7/18)
近年	7/15	7/18	7/25

注) 括弧書きの日付は推定値

- ・今年度は草刈り運動期間終了と早生品種の出穂の間隔が短く、ほ場へのカメムシ類の飛び込みが懸念されるため、穂揃期防除は遅れずに実施する。

イ ニカメイチュウ

- ・要防除水準（防除時6月中旬頃のさや枯最盛期被害茎率：3%）に基づき防除要否を判定し、適期に防除する。
- ・前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

ウ いもち病（葉いもちの初発確認日 平年：7月9日、R7：7月2日）

- ・箱施薬剤等を施用していない場合は、予防剤を6月中旬頃までに散布する。
- ・BLASTAM情報（農業研究所）を参考に常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。



BLASTAM 情報
（葉いもち予測システム）
はこちらから

エ 紋枯病（紋枯病の初発確認日：6月18日、平年：6月27日）

- ・前年多発したほ場などでは、出穂3～4週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表8）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表8 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 （発病株率）	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）
てんたかく	5%	出穂14日前頃
コシヒカリ・富富富	15%	出穂10日前頃
てんこもり	15%*	出穂7日前頃

※てんこもりの要防除水準は暫定値

オ 白葉枯病

- ・常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤等を散布する。
- ・ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

カ 稲こうじ病

- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

キ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。